

# 川系男子の『川と人』めぐり No. 7～九州『川と人』めぐり～

坂本貴啓（筑波大学大学院 生命環境科学研究科 博士前期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ）

## 『川と人』めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。

### 1. 10泊11日の九州『川と人』めぐり

2012年10月19日から29日にかけて調査で川と人めぐりをするようになった。私の研究では『河川市民団体の活動量の定量的分析』と題して、各流域どれくらいの市民活動のパワーをもっているかを今まで目にみえなかったものを活動量として表してみるとところに魅力があると思っている。活動量には2つあって、どれくらい川に対して市民活動によるお金を投資しているかを示す『金銭的エネルギー』とどれくらい川に対して人と時間をかけているかを示す『人的エネルギー』の2つの軸がある。これらを得るためには直接市民団体の人から活動の情報を聞き取ることが重要で、お願いをする必要がある。私の野望としては109水系だが、まずは手始めに自身が馴染み深い九州の各流域の市民団体の人を訪ねていくことにした。計画としては表1のとおりだ(表1)。福岡(遠賀川, 筑後川, 矢部川)→熊本(菊池川, 白川, 緑川, 球磨川)→鹿児島(川内川, 肝属川)→宮崎(大淀川, 小丸川, 五ヶ瀬川)→大分(番匠川, 大野川, 大分川, 山国川)とめぐり、20河川中、16河川を巡る。

表1 九州『川と人』めぐり訪問先

日にち	午前	午後	訪問先
10月19日(金)		遠賀川	堀川再生の会・五平太
10月20日(土)	遠賀川	筑後川	NPO法人遠賀川流域住民の会 NPO法人直方川づくりの会 筑後川フェスティバル(九州河川NPO会議)
10月21日(日)	筑後川	矢部川	筑後川フェスティバル 柳川
10月22日(月)	菊池川	白川	菊池川河川事務所 竜門ダム管理所 熊本河川国道事務所 本荘校区自治協議会
10月23日(火)	白川	緑川 菊池川	白川わくわくランド 緑川情報室 天明水の会 菊池川流域連携会議
10月24日(水)	球磨川	球磨川 川内川	八代河川国道事務所 球磨川水系ネットワーク 川辺川ダム砂防事務所 川内川流域連携ネットワーク
10月25日(木)	川内川	肝属川	川内川河川事務所 大隅河川国道事務所 こうやま川川の少年団 始良川河川愛護会 肝属川水辺館
10月26日(金)	大淀川 小丸川	五ヶ瀬川	宮崎河川国道事務所 NPO法人大淀川流域ネットワーク 大淀川学習館 リバーバル五ヶ瀬川 延岡河川国道事務所 延岡市役所 アースデイのべおか実行委員会
10月27日(土)	五ヶ瀬川	五ヶ瀬川	北川流域ネット NPO法人五ヶ瀬川流域ネットワーク イナカDEイカス イナカWOイカス成果発表会
10月28日(日)	五ヶ瀬川	番匠川	リバーバル五ヶ瀬川 番匠おさかな館
10月29日(月)	大野川 大分川	山国川	ななせ交流会 大分河川国道事務所 大分川ダム工事事務所 山国河川事務所 豊前の国建設倶楽部

### 2. 遠賀川

#### 2-1 堀川再生に向けて(堀川再生の会・五平太)

1日目。夕方福岡空港に到着。普段なら実家に帰るところだが、少し寄り道。堀川再生の会・五平太の会長の中村恭子さんに再会。中村さんは長年、遠賀川水系の堀川(中間市, 水巻町, 北九州市を流れる)の再生に向けて取り組まれてきた方で、水がほとんど枯れてしまっている堀川に当時のような五平太船の浮かぶ舟運景観が復活するのを夢見て活動している(現在は水量確保が課題)。小学生に堀川の歴史を教えたり、EM団子を投入し、絶対的水量の不足からくる水質悪化を少しでも抑制しようとしていたりしている。最近では堀川のあらゆる情報をまとめた本も執筆されている(遠賀堀川とをりを-記録・記憶・そして願い-)

折尾駅の改札を出て、中村さんに案内されたのは夜の堀川。「この飲み屋街に沿って流れる夜の堀川がまたいいでしょう？」飲み屋街の明かりに照らされる堀川は幻想的で美しかったが、折尾駅再開発計画でこの風景が消えつつあるのは少し残念だ。

また堀川は経済産業省認定の近代化遺産に登録されており、現在は九州近代化遺産群のひとつとして世界遺産への登録を目指している。しかし中村さんは言う。「堀川にもっと水が流れるようになってくれれば私はいいと思っているの。」中村さんらは2013年5月ごろに堀川再生シンポジウムを開くことを計画している。堀川に水が流れ、再生の日も近い。



写真1: 折尾駅付近の夜の堀川(正式には新々堀川)

## 2-2 遠賀川の再生を遠賀川流域住民で (NPO 法人遠賀川流域住民の会)

1 日目の夜は実家に帰り、短い帰省を終え、早朝には出発。仏壇の祖父に手を合わせ、旅の安全と実りあるものになるように願う。

2 日目。2 団体目は福岡県飯塚市に拠点を置く NPO 法人遠賀川流域住民の会。理事長の窪山邦彦さんが対応して下さる。遠賀川流域住民の会は遠賀川の河口堰にたまるゴミ問題に問題意識を持ち、上流と下流全ての遠賀川流域住民が同じ共通意識を持って遠賀川再生に向けて取り組もうと活動をはじめた流域連携を意識した会だ。「I LOVE 遠賀川」のキャッチコピーをもとに、一万人以上の人々が清掃活動に参加する仕組みを確立しており、ごみ問題解決に向けたムーブメントになっている。

そんな会なので、流域の各団体の情報収集はよくされており、遠賀川流域の活動団体 77 団体をまとめた冊子をまとめている。冊子の内容と同じものを遠賀川河川事務所のHPでもみることができる。

(<http://www.qsr.mlit.go.jp/onga/withus/index.html>) おそらく、九州の流域の中でもここまでしっかり、各団体の活動を情報収集しているのはここだけだろう。(市民団体の把握状況は各河川事務所によってもばらばらで、リストはもちろん、把握すらできていない流域の事務所も多くある。)

私の調査シートをお願いをさせていただくと、遠賀川流域住民の会の機関誌の送付時期に各団体にも調査シートに応じていただけるように一緒をお願いをしていただけるとのことだ。

話が終わり、外に出ると、河川敷ではマラソンが行われていた(写真2)。秋の快晴の空のもと、川沿いを走る姿は本当に絵になる。滔々と流れる秋の遠賀川を見て、次の約束池へ急ぐ。



写真 2：秋晴れの遠賀川の河川敷

## 2-3 夢プランで次世代の遠賀川のために (直方川づくり交流会)

飯塚市を後にし、少し下流にある直方市遠賀川水辺館(写真3)に到着。ここは私のホームグラウンドであり、私の活動の原点の場所だ。遠賀川水辺館は指定管理者制度で運営されており、NPO 法人直方川づくり交流会が管理委託を受けている。この水辺館を提案したのが直方川づくり交流会であり、夢をかたちにした。16 年間会を引っ張ってきたのが、座長である(NPO は理事長)の野見山ミチ子さんだ。野見山さんは平成 8 年に直方川づくり交流会を立ち上げ、50 年後の遠賀川を子供達に受け継ぐため何かできることはないかと活動を始められ、自身らの「夢」を夢プランとして行政に発信し、思いをかたちにした。会員全員でスイスに近自然河川工法を勉強に行き、いち早く、遠賀川の川づくりにも取り入れたいと行政に提案してできたのが新町護岸(勘六橋上流)である。その他にも導流堤の上に「春の小川」の実験河川を提案したり、遠賀川の拠点になる水辺館を提案したり、次々と提案をされている。今では、赤ちゃんから小学生、中高生、大学生、大人が集まるグループが形成されていて、大変賑わう場になっている。

久々に水辺館に立ち寄った私は里帰り気分で懐かしかった。野見山さんはお変わりなく、いつものように温かく迎えてくれた。

近況報告や自身の研究のご協力をお願いをしている時と野見山さん。「いろんなところを旅して、鮭のように大きくなっていつか帰ってきておいで。」野見山さんと水辺館で話した時間は一時間に満たない時間だったが、会うといつも元気をもらう。今からはじまる九州川めぐりのエールとして胸に刻み、遠賀川をあとにした。



写真 3：住民の夢で実現した水辺館と周辺(春季)

### 3. 筑後川

#### 3-1 九州中の NPO が筑後川に集う日

##### (NPO 法人筑後川流域連携倶楽部)

遠賀川を後にし、電車で久留米市へ。ここからは筑後川流域。今日から 2 日間筑後川では筑後川フェスティバルが開催され、筑後川の市民団体はもちろん、九州各地から団体が集まる九州河川 NPO 会議（写真 4）というものが開催されていた。NPO 法人九州流域連携会議というものがあ、そこに加盟ないし、交流がある人が集まっている。これを逃す手はなく、会場へ向かった会場につくと、知った方ばかり。邪魔にならないように、ギャラリー席に座ろうとすると、「坂本君！待ってたよ！」と見学に行くとしか言ってなかったが、なぜか僕の席が会議の一角に用意されていた。今回の会議のテーマは防災で、今年被害のひどかった北部九州の大雨を事例にどのように九州の各流域で連携をとって減災活動を実施するか議論がされていた。近年大雨の多発する九州にとっては緊急重要課題である。会議の終了時に私の研究を説明する時間をいただき、調査シートをお願いした。会場の皆さん「いいよー！うちの流域は俺にまかせといて。」の一言で快諾。今から各流域、お願いして周るのに、こんな簡単に快諾もらっていいものか少し戸惑ったが非常にありがたい。

会議が終了し、夜は旅館で『夜鍋談義』が開催される。いわゆる立食パーティだが、食べる時間を惜しんで、あらゆる筑後川の団体の人に研究協力をお願いして周る。このフェスティバルの運営主体は NPO 法人筑後川流域連携倶楽部（理事長：駄田井 正）で、筑後川の流域連携づくりはもちろんのこと、坂東太郎、筑紫次郎、四国三郎の異名をもつ利根川、吉野川を呼んで、暴れ川つながりの交流も行っているパワフルな団体だ。あらゆる連携をつくることで流域圏の活性化を目指しており、ユニークな活動である。



写真 4：九州河川 NPO 会議の様子

#### 3-2 船で筑後川の河口へ

##### (NPO 法人大川未来塾)

九州川巡り 3 日目。筑後川の昇開橋のある諸富港から筑後川河口のクルージング船に乗れるというので、参加。4 月に筑後川にきてこの場所にもきたが（5 月号参照）、船から昇開橋やデ・レイケの導流堤をみることができる（写真 5）。雄大な筑後川の河口を船で下る。船の中では利根川、筑後川、吉野川の人らが一緒に船旅を楽しんでいた。また、盲目の演歌歌手、牧山ひろしさん（一期一会の歌い人）が筑後川の曲を披露されており、船旅を演出している。

この船旅の運営をされているのが今回の筑後川フェスティバルの運営母体の一つである、NPO 法人大川未来塾の方々だ。大川未来塾は筑後川の河口に位置する大川市を拠点に家具の街大川市の活性化を目指して、活動をされており、まちづくりリーダーの育成を目指している。私たちが快適な船旅ができるように当日の運営をはじめ、色々と準備をしてくださっている。筑後川の活動が活発なのはこういう団体がいくつかあり、互いに協力しているからだと思う。

降りてからは、筑後川フェスティバルの本会場である、佐野常民記念館に向かった。（佐野常民とはご存じのとおり、博愛主義を提唱し、日本の赤十字の原型をつくった人物である。）会場は筑後川のほとりであり、そこで、物産市やコンサートなどが行われていた。そういえばこういう詩をきいたことがある。

まさにこのことだ！（遠賀川水辺館に展示あり）

川は洪水対策や水の利用だけでなく  
人々が集い賑う物であってほしい  
川で絵を描き詩を詠い音楽を奏で  
自然を学びお祭りをして さまざまなボランティア  
活動の場としたい  
文化の香りがする〇〇川流域でありたい



写真 5：筑後川遊覧船と昇開橋

#### 4. 矢部川

##### 矢部川流域の橋渡し

###### (矢部川をつなぐ会/水の会)

少し時間は前後するが2日目の夕方、矢部川をつなぐ会の方にヒアリングをすることができた。会長の松富士将和さんにお話を伺った。この会は矢部川流域の単独で行われていた活動の一つをつなごうと2005年に設立された。現在は9団体が加盟している。『ゆつら〜っと矢部川』を合言葉に多くの人々が矢部川流域に訪れるようなリバーツーリズムのような企画やゴミマップ作成をし、環境美化にも精力的に取り組んでいる。そんな矢部川をつなぐ会だが、もともと呼びかけの中心になったのが、柳川市の掘割で活動する『水の会』の活動がある。水の会は「いい川・いい川づくりワークショップ」の広松伝賞で有名な故 広松伝さんが設立した団体である。1997年に掘割の埋め立て計画が、自らが務める柳川市の下水道の部署で持ち上がった。内部者でありながら、掘割を埋めてはいけないと市長に直談判し掘割埋め立てに待ったをかけた。掘割を埋めれば、有明粘土層の上に成立している柳川のまち全体が地盤沈下してしまうことを知っていたことはもとより、貴重な水文化を消失することを知っていた。これをきっかけに水の会を設立し、長年にわたり掘割の浄化運動を続けてきて現在の柳川がある。スタジオジブリ作成の「柳川掘割物語」が明るい。そういう経緯をもつ水の会のメンバーがいたからこそ、矢部川をつなぐ会は実現したと思う。広松さんの後継者として、水の会の事務局長をされていた故松石めい子さんが力を入れてつくったのもこの矢部川をつなぐ会だった。そんな想いの上にこの会はできている。3日目の午後に少し柳川に寄る時間があつたので、1時間ばかり、掘割で川下り船に乗った(写真6)。柳川・矢部川流域の情緒は今もここに確かにある。



写真6：柳川の川下り

#### 5. 菊池川

##### 菊池川流域の賑わいを取り戻すために

###### (菊池川流域連携会議)

4日目。いよいよ熊本入り。熊本には1級水系が4河川あり、そのうちのもっとも北に位置するのが菊池川で、菊池市、山鹿市、玉名市などを流れる。まずは菊池川河川事務所へ行き、情報収集。事務所の方に研究の趣旨を説明し、情報提供いただいた。菊池川流域には菊池川流域連携会議という流域連携ネットワークがあり、そこに10団体程度が加盟しているという。明日の夜ちょうど、流域連携会議の集まりがあるらしいので、それに参加して代表者と直接交流できることになった。

明日の夕刻にまた菊池川流域に来ることを約束し、事務所をあとにした。少し時間があつたので、竜門ダムを見学した。なぜかヤギが迎えてくれた(写真7)。ダムサイト周辺は紅葉がはじめていた。

時間は少し進むが、5日目の夜、菊池川流域連携会議の方にお会いした。菊池川流域連携会議では、平成10年に、九州でいち早くリバーツーリズムを導入し、川を題材とした観光の試みを実施したという。これは九州地方整備局が打ち出した九州川の魅力再発見プロジェクトの3本柱であるリバースクール、リバーツーリズム、川の情報室の一つであり、九州の川づくりにおいても重要な意味をもっている。菊池川流域連携会議の代表の山崎寿雄さんのお話によると、まずは地域の活性化を目指すということでこの取組みを始められたという。また、菊池川流域連携会議をサポートする会としてできたのが「かわんたみ」(本山幸嘉さん)であるという。その他にもBODが25の畜産による水質汚染の課題が残る合志川河畔をきれいにする会(蒲原進二さん)や七城環境ネットワークなどさまざまな会が菊池川の流域で活動している。絆の固いネットワークに感じた。

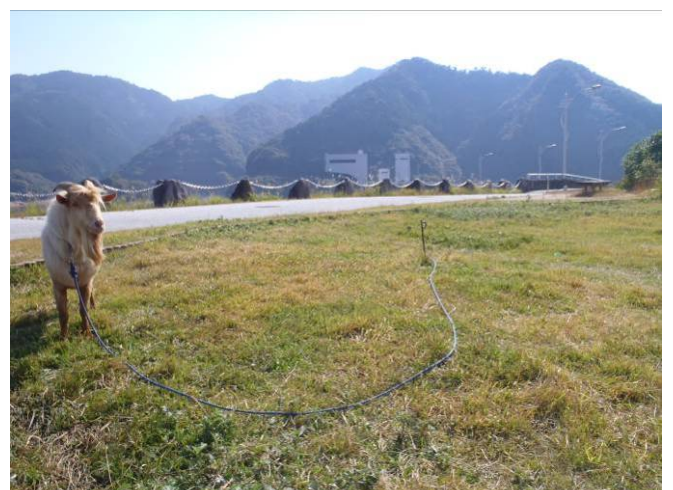


写真7：ダムサイトでむかえてくれたのはヤギ

## 6. 白川

### 白川流域の防災力向上へ

#### (NPO 法人白川リバーネットワーク)

菊池川を後にし、白川に到着。阿蘇の外輪山より流れ出て、熊本市内の中心地を流れる川だ。熊本河川国道事務所で白川と緑川の市民活動の状況等をお聞きした。最近では国土交通省の部署にも地域連携課というものがあり、地域連携を重視しているのがうかがえる。またこの時お話しいただいたのが、今年の夏の大雨の話。龍田地区で計706棟、が全半壊や床上・床下浸水、阿蘇では大規模土砂災害が多発したという。「いかにすごかったかはリバーネットワークの方からもきけるとおもいますよ。」

その後、リバーネットワークの会員であり、本荘校区自治協議会の榮そのみさんを訪ねた。榮さんの家の付近も井手が満水近くなり、これ以上降るとあふれるというところまで来たそうだ。榮さんは日頃から白川リバーネットワークで活動して想定していた自主防災活動を活かすべく、ご近所に「このままじゃ危ないから早く非難しよう！」と呼びかけてまわったという。しかし、みんな「うちはまだ大丈夫」と逃げる人は少なかったという。リバーネットワークで自主防災を掲げて活動してきたのにまだ課題はあったようだ。

5日目午前。今度は白川わくわくランドを訪ねた。リバーネットワークの事務局の谷光承が対応してくれた。今日は小学生がわくわくランドに白川流域について勉強にくるといので、見学させてもらった。今日は一日かけて白川流域を周るそうで、スクリーンで白川の流域の概要をみて、この川があふれるとどうなるかを学んでいた(写真8)。谷さんら事務局の方はいかに水害が恐ろしいかを分かりやすくお話しされていた。小さい頃からの防災教育でしか本当の意味での防災力はつかないと実感した。



写真8：白川わくわくランドでの防災教育

## 7. 緑川

### 緑川一斉清掃がつくりあげた強固な連携

#### (NPO 法人緑川流域連携会議/天明水の会)

白川流域をあとにし、午後からは緑川へ向かった。ところどころに湧水の湧き出ている池があり、美しい景観が広がっている。緑川情報室へ到着。緑川流域連携会議の事務局を務める岡裕二さんにお会いした。緑川流域連携会議のはじまりは民間主導ではじまった精霊流し後の緑川一斉清掃で、緑川の清流を取り戻す流域連絡会として平成4年に35団体でスタート。2年目以降、一斉清掃に行政が追随するかたちで広がりを見せ、現在では今年で19年目を数え、約2万人が一斉清掃に参加をしている。「川は人をつなぐ手段です。」と岡さん。地域をよくしたいと考えた末に手段として行き着いたのが緑川だったという。

また、緑川流域の連携は一斉清掃だけにとどまらない。上下流の交流が非常に重要と岡さんは続けた。「川は地域をうつす鏡です。河口をみれば一発でその流域の品位が分かる。」これにはギクリとした。わがふるさとの遠賀川流域も河口堰には大量のゴミがひっかかっている。

上下交流の経緯をもっと知るべく緑川流域連携会議のコアメンバーであり、NPO 法人天明水の会の濱崎勝会長の自宅を訪ねた。濱崎さんによると、1980年代以降、アサリの漁獲が大幅に減り、漁業に課題がでてきたという。一雨降ると養分が海に流れてきていたのがなくなったのが原因と気づいた漁師達は源流部に植林をはじめた。これが流域連携のもう一つの要因である。現在は林野庁と分収増林の計画を立てて、植えた年から80年後に国：民＝2：8で利益配分することになっている世代を超えた壮大な計画がある。緑川河口に沈む夕日(写真9)に黄昏れつつ、いつまでも海に大漁旗が揚がることを願い、緑川流域をあとにした。



写真9：緑川の河口に沈む夕日

## 8. 球磨川

### 球磨川流域住民の選択

#### (球磨川水系ネットワーク)

6 日目。旅も折り返しだ。八代河川国道事務所訪問後、約束をしていた球磨川水系ネットワークの事務局の右田いくみさんにお会いする。右田さんとの待ち合わせの場所は新萩原橋付近の球磨川河川敷。まず案内されたのは河畔林。木陰があり、水際までアクセスできるこの場所は荒れ放題の草地を手入れして、川の近くでお弁当を食べたり、休んだりできるようにしたいと有志の作業によって立派な木陰ができあがった。「お金をかけずに何かをしたいと思って、助成金とかお金をもらって活動するのもいいけど、助成金をもらうこと、使うことに迫られて、ある時楽しくなくなっている自分があることに気づいて。」こういう経緯もあり、球磨川水系ネットワークは敢えて法人化の道をとらずにやってきたという。

右田さんに案内していただき、上流に上っていくと、撤去中の荒瀬ダムがあった(写真 10)。湛水期間だったところは瀬が形成されており、ここが湛水していたとは思えない不思議な光景だった。

さらに上流へ移動し、球磨川の支流の川辺川へ。川辺川の河原に降り、美しく緑色に透き通った水を見つめながら右田さんが話し始めた。「川辺川、きれいでしょ？川辺川ダム開発は止まったけど、賛成派も反対派も中立の私達球磨川水系ネットワークも今までみんな苦しかった。結果的に私達住民はダムはいらないという選択をした。けどもし、この流域で水害が起きても、流域の住民は国交省のせいにははいけないと思うの。それは私達が住民の人に伝えていかなきゃいけないの。」これには本当に心を打たれた。ダムが良い悪いではなく、住民がリスクを承知でそういう選択をしたということが考えさせられた。まだ書きたいが字数の関係で別の機会に。



写真 10：荒瀬ダム撤去の現場

## 9. 川内川

### 大水害から 6 年

#### (川内川流域連携ネットワーク)

球磨川を後にしたのは日が暮れてからで、川内川へ急いだ。「よう！待ってたぞ！」と声をかけてくれたのは川内川流域連携ネットワークの事務局の上野豊さん。久々に再会。上野さんと最初に出会ったのは僕が大学一年の夏休み。初めての里帰りです賀川水辺館に顔を出した時、川内川流域が豪雨災害で被害を受けた連絡が上野さんからはいり、夏休みで時間に余裕のあった僕ら学生が復旧支援に行くことになったのが最初だ。それ以来、2006年10月の川のワークショップや2007年5月の再訪問や2009年3月の大学生等活動交流会など度々訪問してきたが、今回は久々だ。水害後すぐに大学生の災害ボランティア根とワーク JOC (Joint of College) を立ち上げ、九州各地で大学生の川仲間を増やしていった。そんな川内川水害から6年経った。大学一年の頃に「何か役に立ちに行きたい！」と想った熱い気持ちがよみがえってくる。初心を何度でも思い起こさせてくれる大切な場所だ。

上野さんとの雑談の中で、これからの地域行政のあり方の話がでた。「川内川は宮崎と鹿児島にまたがって流れている。またいくつもの市町村も。いっそのこと、流域単位で自治をやればうまくいくと思わないか？」たしかに流域は古くから文化圏としても共通性が高いし、なにより水収支の管理がしやすくなるから治水対策も効率よさそうだ。空想に話をふくらませながら川内川の夜は更けていった。

7 日目。川内川河川事務所を訪れ、活動に関してお話を聞いていると、防災活動のほかに環境学習の活動が非常に盛んな流域なようで、事務所はじめ、川内川流域連携ネットワークも行っている(写真 11)。ここで育った子供はどんな大人になるのか楽しみだ。



写真 11：環境学習の様子(上野さん提供)

## 10. 肝属川

### 九州ワースト1を争う肝属川

(こうやま川の少年団/始良川河川愛護会)

川内川を後にし、鹿児島市から船で大隅半島へ渡る。大隅半島には日本最南端の一級河川、肝属川がある。肝属川は九州ワースト1の水質を遠賀川といつも争う河川で、名前こそ聞いたことがあったが実際に来るのはこれが初めてだ。

事前の調査では肝属川流域には2団体しか市民団体を見つかることができなかった。肝属川流域の市民活動の実態を知るべく肝属川河川事務所へ、色々とお話しを伺ったが事務所が把握しているのも始良川河川愛護会とこうやま川の少年団だけのようだ。

まずはこうやま川の少年団を訪ねた。この団体は肝属川の支流の高山川で子供達を中心に活動する団体で、肝属町教育委員会の中に設置されているようだ。なので、最終的には私の河川市民団体の定義からは外れるのだが、大変興味深い名前だった。『川の少年団』こんなセンスのいいネーミング誰が思いつくのだろう。川の少年団の事務局の永井紘俊さんにも他に活動団体を知らないか伺ったが分からず。この「肝属川水系は少し上流にいけばたくさん川遊びできる川があって、自分らが子どもの時から川は遊ぶものと思っていたので、わざわざ活動という風に意識しないのではないか」とおっしゃっていた。

もう一つの団体、始良川河川愛護会にも伺い、お話しをきいた。この会は昭和56年に発足し、クリーン作戦やアユやウナギの放流に力を入れてきている。こちらの会は肝属川水系は汚いと認識されているが、川のどこで向き合っているかも市民活動に大きく影響しそうだ。また、鹿屋市で水辺館という建物があると聞いて尋ねた。名前はそのまま肝属川水辺館(写真12)。遠賀川水辺館開館の1年後(2005)にできており、なんとなく親近感がわいた。

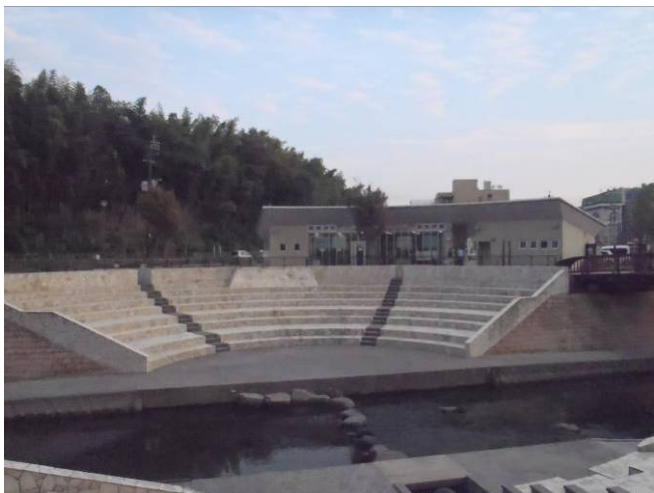


写真12: 肝属川水辺館

## 11. 大淀川・小丸川

### 母なる清流求めて/小丸川流域の謎

(NPO 法人大淀川流域ネットワーク)

8日目。旅もだいぶ終盤だ。宮崎市内に突入し、大淀川を訪ねる。宮崎市内を滔々と流れる大きな川だ。大淀川には大淀川流域ネットワークがあり、宮崎河川国道事務所の方に事務局の場所を教えていただいた。

残念ながらこの日は代表の杉尾哲先生(元宮崎大教授)がいらっしゃらないのと、事務局の方が立て込んだイベントで大変お忙しいとのことで、ご挨拶だけをしてきた。

せっかく大淀川にきたので、大淀川学習館にも少し立ち寄る(写真13)。とにかくこの学習館よりも大きく、図書室、展示室、実験室、中庭など様々な設備がそろっており、さらに学芸員の方が常勤でいる博物館機能をもった施設だ。この日はちょうど、子供たちがきていて環境学習をしていた。

大淀川はまた今度ゆっくり来てお話しをきくことにし、宮崎県を北上し、五ヶ瀬川流域を目指す。五ヶ瀬川流域と大淀川流域の間に小丸川というあまり聞かない名前の1級河川がある。しかしながらこの流域は市民団体の活動の実態が分からず、調査できず。九州には1級水系が20河川あるのだが、この流域だけまったく情報につかめなかった。本当に活動実態がないのか、あるいは私が知らないだけなのか。市町村で言うと、日向市や高鍋町などを流れているが、もしどなたか情報を持っている方いたら教えていただきたい。



写真13: 大淀川学習館

## 12. 五ヶ瀬川

イナカ de イカス イナカ wo イカス

(NPO 法人五ヶ瀬川流域ネットワーク/北川流域ネットワーク)

8 日目午後、延岡市に到着。まずは五ヶ瀬川の学習館、リバーパル五ヶ瀬川へ。この学習館は NPO 法人五ヶ瀬川流域ネットワークが指定管理者として管理している。リバーパルは北川と友内川の合流点にあり、友内川水門の埋め立て地内にある。館からみる芦原が美しい。

リバーパルのスタッフであり、ネットワークの事務局である山田大志さんに五ヶ瀬川流域ネットワークが持つ情報はもとより、各行政の市民団体の窓口に同行していただき、調査のサポートをいただく。年が近いこともあり、兄貴分的に非常に親しみやすい。

今まで強行軍で他の流域を巡ってきたが、五ヶ瀬川流域には今日から別目的もかねて 2 泊 3 日する。五ヶ瀬川といえば天孫降臨の地、高千穂峡で有名だが、今回は支流の北川が舞台。私の所属する白川研『川と人』ゼミのメンバーが宮崎県の新しい公共支援事業の一環で「イナカ de イカス イナカ wo イカス」というユニークなプロジェクトで、北川流域を活かしたまちづくりの提案につなげるのが狙いで、関東近郊の学生を募集し、卒論や修論フィールドとしても提供している。このプロジェクトを中心となりコーディネートして下さったのがリバーパルの館長であり、ネットワークの理事長の土井裕子さん。現地でも私達それぞれの目的にあった活動のサポートはもとより、あたたかく歓迎をしていただいた。また北川流域ネット代表の矢野純一さんは翌日にカヌーで祝子川を下る企画を開いてくださったり、流域の案内をしてくださったりと短い期間ではあったが様々な体験をさせていただいた(写真 14)。

皆さんも行楽の秋、天孫降臨の川、五ヶ瀬川流域の中でも一際透き通った清流、北川に行ってみてはいかがでしょうか。



写真 14 : カヌーで祝子川 (五ヶ瀬川水系) を下る

## 13. 番匠川・大野川

ネットワークが機能しなくていい仕組み

(番匠川流域ネットワーク/大野川流域ネットワーク)

10 日目午後、五ヶ瀬川流域を後にし、大分県に突入。大分県には南から番匠川 (写真 15)、大野川、大分川、山国川の 4 つの 1 級河川がある。車窓から秋の風景に色づく番匠川がみえる。

番匠川にある番匠おさかな館 (9 月号で紹介) を訪ねる。おさかな館は国道 10 号線沿いの道の駅やよいに併設された施設。番匠川流域ネットワーク事務局長の平野憲司さんにお会いする。私は初対面だと思っていたが、九州「川」ワークショップなどで私が発表をしたのを覚えていてくださったり、「学生の川のネットワークをつくってくれてありがとね。」とっていただいた。

番匠川流域ネットワークは平成 13 年に設立されたが、もともと大分県が打ち出した一村一品運動の際にまちづくり活動の基盤があったので、ネットワークの設立は非常に円滑に進んだという。発足から 10 年以上が経ち、現在のネットワークの活動を訪ねたところ、現在はほとんどネットワークが主体となって機能することはないという。というのは、ネットワークは現在までつなぐ役割に重きを置いてきたが、それぞれの団体が必要に協力し合う体制が確立できているので、流域ネットワークで見守るだけで、うまくネットワーク化できているという。日本の河川再生を目指す JRRN もつなぐという役割の面においては最終的にはこのような形態になればベストだと思う。

また、本来ならこの後、大野川流域ネットワークの幸野さんにお会いしてお話しをお聞きする予定だったが、ご都合が合わず。またの機会に大野川の河童小屋などの話は紹介したいと思う。



写真 15 : 秋色の番匠川



## 14. 大分川

### 生まれたばかりの川活動の流域

#### (大分川「ななせ交流会」)

九州『川と人』めぐりも最終日。長かったようであつというまだった。最終日は大分市内からスタートし、大分川を訪ねる。大分川の支流に七瀬川という川があるが、ここにななせ交流会という会がある。実はこの会、昨年できたばかりの生まれた。活動1年目にも関わらず、かなりの活動頻度で勢いのある会だ。「ななせ館」(写真16)という七瀬川の施設があり、そこを拠点に活動している。会の代表の矢野多美子さんらとお話しをしていると、「私達去年、遠賀川の直方川づくり交流会というところに見学に行ったんですよ！色々不安でしたが、女性がリーダーの会で、しかも15年以上活動している人たちがいると聞いて勇気づけられました。」直方川づくり交流会には年の離れた妹ができた。

実はこの会の立ち上げに尽力した国交省の方がいるが、両方ともその方が立ち上げに関わっている。いわゆる仕掛人だ。大分川は長年、川の市民活動がなく、活動の乏しい地域だったが、その現状を一緒に変えていこうと話をもちかけたのが、その方。(さらに九州流域連携会議をつくる際に後押ししたのもその方。九州の市民団体にとっては強力な応援団だ。)

地域を変えたいという女性、それを後押しする行政マン、拠点となる施設、同じような条件を持ったななせ交流会だが、今後どういう風になっていくか非常に楽しみだ。新しく生まれたばかりの活動が大分川で根付く日も近い。

流域の河川事務所など車で連れて周って下さった会の方々に感謝申し上げる。



写真16：ななせ館

## 15. 山国川

### 変化する市民活動

#### (豊前の国建設倶楽部/NPO 法人レスキューサポート九州)

大分市内を出発し、山国川へ。今回の旅の最終目的地となる。

豊前の国建設倶楽部の木ノ下勝矢さんにお会いする。木ノ下さんの団体の活動の歴史は九州の中でも大変長く、1984年からスタート。(当時木ノ下さんは30代だったそうだ。)

江戸時代にはもともと豊前として一つの国だったのが廃藩置県により、山国川を挟んで大分県と福岡県に分断されてしまった。山国川を挟んで背中を向いてしまった地域を一つにしようとして行政界の枠を越えて活動しようとして長年地域おこしに尽力されてきている。(すなわち今発足10年目前後を迎えようとしている団体が歩んだプロセスを20年近く前に経験している。)

木ノ下さんの団体が最近特に力を入れているのが、防災・減災活動。山国川流域も今年大きな被害を受けた。地域の減災力を高める仕組みが確立されていないことに加え、視覚・聴覚障害者の人が非常時にどう対応したらいいのか、どう手助けをしたらいいのか仕組みがない。これをどうにかしてこの地域でモデルケースをつくり、全国の減災計画を変えていこうと1999年に立ち上げていたNPO法人レスキューサポート九州に防災活動を担わせ、NPO法人だった豊前の国建設倶楽部を普通の任意団体に戻し、活動の中心をレスキューサポート九州にシフトさせた。NPO法人化していく例はよく聞くが、任意団体に戻すというのは聞いたことがなかった。「活動も年とともに変化している」という言葉には長年のキャリアゆえの説得力があった。

山国川河川事務所に連れて行って下さった上、空港まで送っていただきありがとうございました。



写真17：水害後土砂のたまった山国川(平成大堰)

## 16. 旅の終わりに

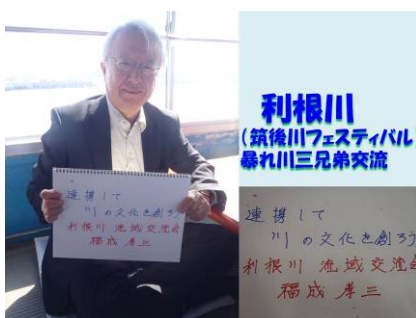
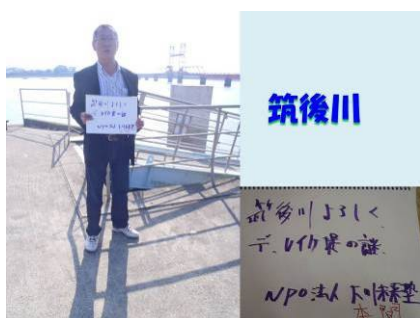
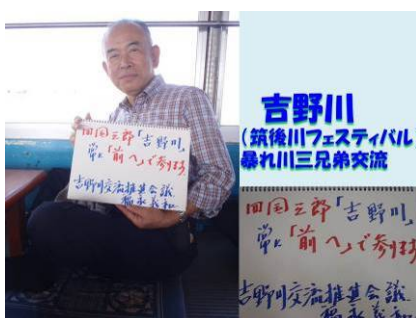
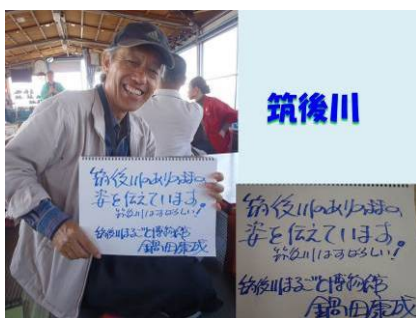
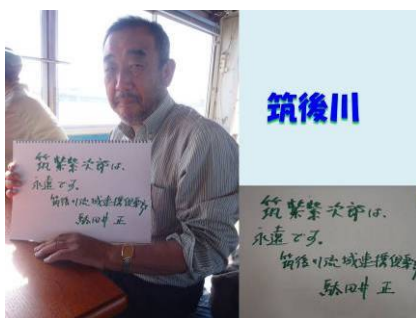
この旅で名刺交換した人だけで50人以上。初対面でない人も合わせると相当な人数の方にお会いしたことになる。河川事務所を周るのが円滑に行くようにと各事務所にあらかじめ連絡を入れて下さったSさん。

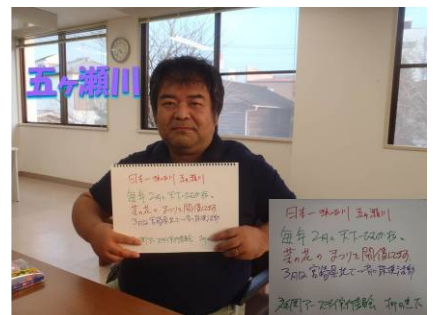
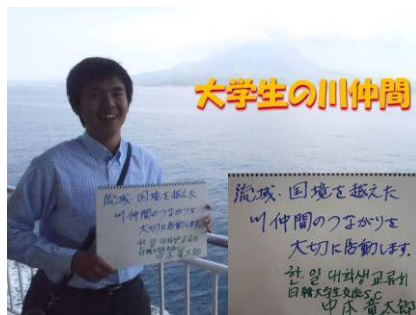
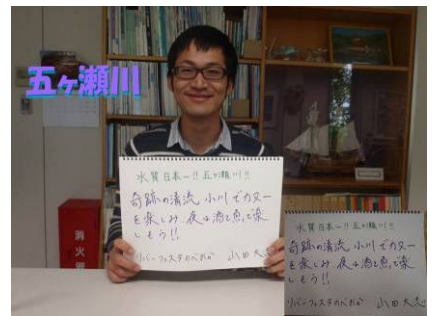
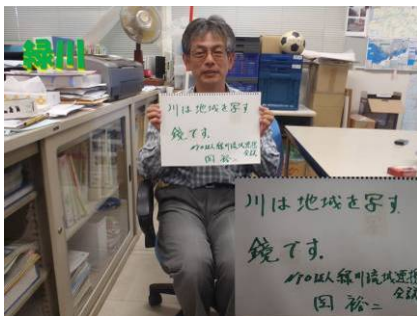
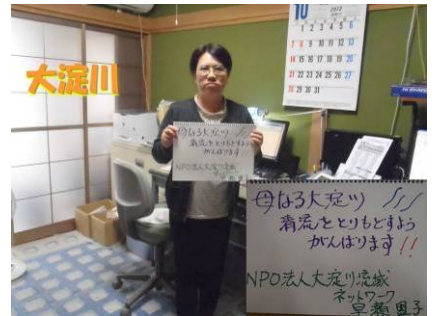
以前より川仲間の大学生の協力も多くあった。筑後川流域を対象に同じ市民団体の研究をしていた久留米大学の張智樹君は筑後川流域の団体との調整や今後の調査シートの回収を申し出てくれた。

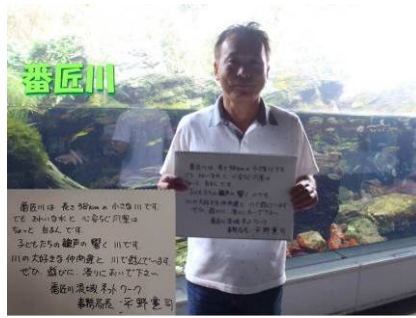
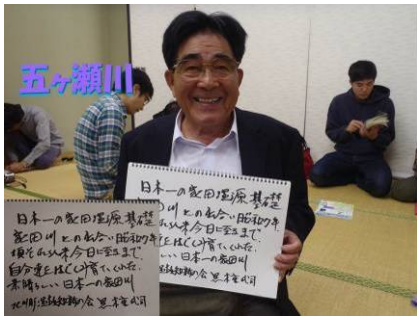
また東海大学の中本竜太郎君は南九州の地理に詳しいからと白川・緑川の団体との事前調整はじめ、熊本、鹿児島、宮崎3県をつれて周ってくれた。遠賀川で一緒に活動していた刀禰洗太君も勤務先の大分で対応してくれた。また白川研の『川と人』ゼミの愉快的な仲間と北川の思い出を共有できたのもうれしかった。

他にも数多くの方に温かいご支援とご協力をいただき、10泊11日の旅を終えることができました。この場を借りて深く感謝を申し上げます。

最後に旅先で川仲間からスケッチブックにいただいたメッセージを一挙紹介して、今回の九州『川と人』めぐりを終わりにします。長い駄文にお付き合いくださった読者の皆様もありがとうございました。







- ・滞在日数: 11日間
- ・川下りした河川: 3河川
- ・ダムカード獲得数: 1枚
- ・訪ねた河川学習館等: 11施設
- ・訪ねた河川事務所等: 12機関
- ・名刺交換した人: 62名
- ・旅をサポートしてくれた友人: 3名
- ・出会った行政の人: 30名 (推定)
- ・出会った市民団体数: 50団体 (推定)
- ・旅で出会った人: 200名以上



【筆者について】  
坂本 貴啓 (さかもと たかあき)

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。筑波大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻 博士前期課程在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『郊外の湖沼・河川流域における社会変化に伴う流域管理のあり方に関して』と題し、流域の水質・水量の将来予測や河川市民団体の特性について研究中。最近のお気に入りには川で活動する人のお話をきくこと。